



花も嵐も

銀マドの ねこさん。

はじめに

第二版

昔、GSXというオートバイに乗って全国を旅したことがあった。
そのときのことを回想して纏めてみました。

旅の記録というよりも、人生の記録です。

(筆者)



第1話

増毛から更に北へ...＜北海道＞

バイクは、まだ慣らしが終わっていなかった。新車のころのことだ。まだ子供はヨチヨチ歩きだったことを今でもうちのんが話す。そんな娘を置いて私がひとりで旅立ったことをそっと責める。その子ももう来年は大学生になる予定だ。

1989年の夏、舞鶴のフェリー乗り場に向けて出発する私を、アパートの軒下で雨を避けて小さな手を振りながら送り出してくれたシーンが深く印象に残っている。それは私にとって4度目の北海道で、最後の北海道への上陸だった。

初めてこの大地に降り立ったのは1977年の夏のことで、そのころに未完成だった国道が1989年には幾つか開通して、ツーリングで走るバイクの数も格段に増えつつあった。

小樽のフェリーターミナルを降りてから日本海沿岸の国道を北上した。増毛という街を通り抜ける国道も当時には開通したばかりのひとつだった。

しばらく走って小平町という小さな集落を通過するとき「さようなら小平小学校」と校舎に大きく書かれた文字を見つけた。窓ガラスが所々割れていたが、校舎は朽ち果てていたわけではなかった。この学校の卒業生たちは今ごろ何処で何をしているのだろうかと思うとジーンときた。

旅先で廃校の学舎に出会うことはのは珍しくなかったのだが、最果ての大地のまっすぐな海岸道を走りつづけて見つけた文字。その大きく書かれた文字がソロツーリストの私にはこたえた。

この年の旅では、他にも幾つかの大きな感動があった。オーホーツク沿岸を走ってい

たときのことである。やはりここも過疎が「じわっ」と、いや、「どかーん」と襲ってきて、街じゅうが静まり返っている雰囲気隠せない。

沈みがちな私が見つけたものは、草が茫茫と生い茂る中に「もうここを汽車は走りません」と書いた看板だった。幹線道路と並行して走っていた鉄路を横切る踏切跡だ。

国鉄が廃線になって、少しずつ変わり果てていく集落を見るのは辛かった。

ぶつぶつとひとりごとを言いながらに、私は更に大地を走った。

知床半島では、数年前に来たときにはウトロまでしかなかった道がその先の在所まで、しかも舗装されて完成している。

登山道しかない道だった知床峠に観光バスが走っている。バスの吐き出す黒煙にユリの花が揺れていた。

斜里岳の東の峰を越える「野付国道」はダートではなく舗装に変わっていた。

美しい思い出や感動的な出来事などが数限りなく北海道にはある。だからもう一度といわず行きたいとも思う。ひとりでも多くの人に紹介ができればいいなと思う。

しかしながら、いつも真っ先に頭に浮かぶのは、素晴らしかったものの思い出ではなく、開発されて人に踏みにじられてしまった自然の姿だ。単に昔は良かったと言いたいのではない。乱開発についてみんなで真剣に考えねばならないのなか。

もう一度、あの大地を走りたい。しかし、無残な姿を見るのは嫌なので躊躇している。

最後に北海道を訪ねた1989年からの幾日もの空白の日々が過ぎる。それが私の躊躇の気持ちを表している。

2006年4月18日(火曜日)【花も嵐もI】'05年編集版

第2話

感涙の傘松峠　＜青森県＞

東北は遠くて大きい。その地を走破することへの挑戦が4回目だったか5回目だったか、そんなことはどうだっていい。とにかく私は北に向かって走って、まだ行ったことのない青森県に深く踏み込んで走ってみたいと考えていた。

発荷峠までは随分と昔に来ていたので、こんど来るときには八甲田山をぐるりと回って、下北半島へも行ってみたいな、と夢を膨らませていた。

1986年の旅でこれが実現した。

大湯温泉で泊まって、奥入瀬を越えて八甲田山系に入った。真夏であるのに涼しい。低木に囲まれてた小さな沼の水辺には雪が少量だけ残っていて、空気が白くうっすらと霧状になって流れている。

しばらくして風向きが変わると、これが分厚く深い霧に変化した。真夏に出会う自然の雪に感動させていただきながら、私はのんびりとバイクを進めてゆく。傘松峠の標高を記した峠のてっぺんを過ぎるときには、神秘的な霧はブナ林の中を流れていた。

初めて東北に来たのは随分と昔のことだった。京都を発ち本州の山間部を高速道路も使わずに走り抜けてきた。福島で友人に会い松島まで3日間を要した。久しぶりに真っ青の海を見たとき、熱い感動が私を襲った。若きころのほろ苦い思い出だ。

傘松峠への道程でも似たものがあつた。この峠は単なる県境線で、何の変哲もない只の峠に過ぎなかったのだが、旅を幾日も続けてきた果てに出会えた私だけが感じえる景色であつた。だから感動できたのだ。嬉しかった。本州の最果てである青森県へ到達する笠松峠にバイクを止めて、やっと来たことを喜び、ぶつぶつひとりごとを繰り返しながら、周辺をうろうろと歩き回った。

私はここから青森県を走り始めるのだ。旅の原点とはこういう感動だといつも思う。
感動があるからこそ、その旅の記録の輝き続け、翳らないのだと思う。

2006年4月18日(火曜日)【花も嵐もI】 '05年編集版

第3話

酸ヶ湯のかわいこちゃん <青森県>

青森を走るなら酸ヶ湯は絶対のチェックポイントだと思う。温泉が好きならばなおさらのこと、多少面倒でもここのお風呂に寄って欲しい。東北にしては400円(1996年当時)は少し高かったけど、惜しまずに寄った私の選択を称えたい。

湯舟は千人風呂といわれるだけあって広い。昔ながらの混浴になっていて、脱衣場が男女別々でありながら、湯舟には男女の区別はない。大きな浴槽の淵の両端に境界線マークがあり、そのポイントを繋いだ線が男女の湯舟の境界を意味するらしい。プールのようにラインが引いてるわけでもなかった。その湯舟の淵で、いい歳の爺さんたちがその境界マークぎりぎりのところにスズメが電線に止まるかのように並んでいる風景が滑稽だった。ばあさんたちはそんなことも気にとめない素振りでオープンに湯に浸かっている。まずまず家庭的な雰囲気が溢れていたと思った。

お湯から上がって着替えを済ませ建物の前の駐車場でくつろいでいるときに、駐車場の片隅にある売店の売り子さんと言葉を交わしたときのことだった。可愛らしい子だったのでおでん買うことにした。

そのときに彼女に声を掛けるきっかけは、

「筍おでんをください…。青森では何が美味しいですか？」

だった。彼女は、私の質問にすかさず

「りんご」

と答えてくれた。即答でした。でも私が期待していたのは、違う。

「それは今はないでしょう、今から食べに行くものですよ」

私はこの旅で美味しいもの探していたので、彼女にそう尋ねたのである。でも、赤いほっぺの、津軽訛りのその子と、たったそれだけの会話がとても嬉しくて仕方がなか

った。

お味噌が白くて、生姜が少し入っていて、とっても美味しいおでんでした。彼女のおかげで酸ヶ湯は最高にいい思い出になった。

もちろん、あれから何年も過ぎているのでその子はその店には居ないだろうけど、青森の子って可愛かったなあっていう印象ばかりが甦る。

旅から帰ってズームイン朝というテレビ番組を見ていたら青山さんというアナウンサーがレポーターで出ているのを見て、その人が少し訛を交えてインタビューするのが好きになってしまった。津軽の子はやっぱりカワイイのだ。

2006年4月19日(水曜日)【花も嵐もI】 '05年編集版

第4話

ただ佇む、三内丸山遺跡＜青森県＞

1996年の東北ツーリングでは13日間をかけて東北を走り回って19箇所の温泉に入ってきました。私にとっては思い出深い場所であり不動の記録です。その旅の動機は「三内丸山遺跡」を見てみたいからでした。

縄文時代、まだ1歳ほどの子どもを亡くしてしまったら、村のはずれの墓には埋葬しなかった。自分たちが毎日暮らす台所の片隅に、その子を壺に入れて埋葬したのだ。そんな発掘の報告記事を読んだことで、私は、その遺跡を見てみたいと思ったのです。人の心に触れることができるような気がしました。

ツーリングに飛び出すには、瞬間的なパワーが必要です。しかしそれだけではなく、北の果てまで諦めずに走り続けるだけのエネルギーを保持させてくれる何かも必要です。この三内丸山遺跡は私を釘付けにして、エネルギーをくれました。公開直後には復元された大きな櫓はなく、ただの野っ原に発掘箇所が点在していただけだったのだが、あまりにもその素朴な生活ぶりに感動しました。その夜も感動が冷めず予定を変更して二日目も行った。

旅は気まぐれ。明日の予定は自分で決めるたびだからこそ出来たのだろう。

決してソロツーリングというスタイルを皆さんに押しつけるつもりはないけれど、こういう所に佇んでひとりでのんびりと考えに沈んでみるのもツーリングの醍醐味ではないだろうか。

車に乗ればカーステレオやラジオの音楽が、電車に乗れば周囲の人の会話が否応なしに飛び込んで来る。

それがバイクであれば、自分だけとの会話が一日中続く。何と贅沢なことでしょう。

2006年4月20日(木曜日)【花も嵐もI】'05年編集版

第5話

素敵な駐在さん　＜下北半島＞

下北半島の太平洋岸にはヤマセが吹き、街はしたたかな霧に包まれていました。カワヨグリーンユースホテルを出て下北半島の先端を目指していた私は、半島の首の一番細い部分の太平洋側を北上してゆく。地図を見るためにバイクを止めた集落が「老部」（おいっぺと言うらしい）というところで、ちょうど駐在所の前でした。

いつも私は女性を可愛いとか綺麗とかと表現するので、嘘つきだと思いの皆様が多いかもしれませんが、決して嘘つきではないと自分では思っています。前置きはいいとして、交番の前で地図を広げていると「綺麗な」女性が声を掛けてくれました。交番の奥さんです。

中に入らないかと誘ってくれるので、8月初旬にしてはやや肌寒かったこともあり、少し休憩をさせて戴くことにし、遠慮なくお世話になりました。無添加の林檎ジュースと、さっき作ったばかりのまだ暖かいおからのドーナッツを、奥さんは出して下さった。そして、交番の応接用ソファで色々この土地の話を聞かせてもらったり、私も旅のいきさつなどを1時間ほど話しました。

「老部という村落は寂れた漁村に見えるけど、実は黒字経営で立派な家屋が並んでいるのが交番の窓からも見えるでしょ、イカが大きな漁業資源なんですよ」というような説明をしてくださった。地元の話聞くことはツーリングには欠かせない楽しみですが、まさか駐在所で、しかも、奥様も一緒になって話が聞けるとは驚きで、最高にいい思い出です。

仏が浦の景色の話になったときに、奥さんがテレホンカードを出してきて、遊覧船の乗り方などを説明してくださって、「海から眺めるのがいいですよ」と教えて

くださった。カードは新品で「記念に」と言って私にくださった。

仏が浦は水上勉の「飢餓海峡」舞台でもあり感動もひとしおである。

駐在さん。現在もそこにおいでなのか...、また新しい村へと移って行かれたのか、気になる。

2006年4月21日(金曜日)

第6話

続・素敵な駐在さん　＜下北半島＞

私は「ひとり旅、下北の衝撃」という日記を後になって書かねばならなくなつた。そのわけが次に書かれています。

何故、人はただひとりで旅に出るのだろうか。風に吹かれることにロマンを感じるようになったのは、いったい、いつごろからなのだろうか。そういう遠大な自問を、恥じらいも照れもなくさらけ出すようになると、同じことを感じていた仲間たちがコメントをくれます。ひとり旅仲間がどれだけ増えても、やはり、ひとり旅です。

「ひとり旅ですか、いいねえー」と旅先で話しかけられる。でも私にとって、旅はいつもひとり。日常の生活の中からそっと抜け出すために、あるいは、あらかじめ敷かれたレールの上を決まった手順で走り続けることへの反発……のようなものを感じて、旅に出る。どこまでも淋しくセンチでありながらもロマンに満ちている。そして旅先で様々な人たちに出逢い語り合う。名前も尋ねなければ身の上も聞かない。便りを交わすわけでもなく、やがてその人たちのことを忘れてしまう。それでも旅を続ける。

ひとつの衝撃的な話が目に飛び込んだ。私が下北を旅して2、3年後が過ぎた6月末のある日、ふと朝刊を見て驚きました。青森県の下北半島でひとりの警察官が殺害されたという記事が載っていたのです。

生々しい血痕がパトカーに付着している写真が大きく一面に出ている。その脇に小さく写った顔写真に見覚えがある。

1996年の夏、このお巡りさんが下北半島の老部という寒村の交番に着任して間もないころ、旅の途中だった私は、この交番で朝食をご馳走になっていたのです。

あの日は、少し肌寒い朝でした。「老部」という漁村の交番の前でバイクを止め跨ったまま地図を見ていたら突然、「どうぞ」と太くて低い声で交番の中に誘ってくださった人がそのお巡りさんでした。奥さまと一緒にソファーに腰掛け、私に朝食をご馳走してくださった。できたての美味しいドーナツと、無添加の林檎ジュース。警察官だからという先入観もあって、厳しそうに見えたが、理解のありそうな人で、奥さんも綺麗な人だった。

漁村の話をしたり、息子さんがバイクに乗って東京から帰ってきたんだ、という話などをし、親近感が深まってゆく。「仏ヶ浦」の話もした。テレホンカードを出してきてこんな所だと説明をしてくださった。

「ぜひ、船に乗って海から見ることをお薦めしますよ」と話して、そのカードまでも記念にくださった。8月1日と日記に書いてある。

何度も新聞記事を読み返した。交番の地理や様子が新聞記事と一致する。もう一度地図を広げてみると記事にある「白糠交番」の位置が不明。しかし、こんな田舎にそんなにたくさんの交番があるとも思えないから、あの交番で間違いなのではないだろうか。白糠小学校と老部の集落は2キロほどしか離れていない。白糠交番は老部の交番の事ではないか、と確信している。

しかし、やはり私の勘違いであって欲しい。(合掌)

2006年4月21日(金曜日)【花も嵐もI】'05年編集版

第7話

ひっそり・大沢温泉　＜花巻＞

「ほっと・ゆだ」駅で温泉に入った私は駅前のタクシーの運転手さんに話しかけた。ソロツーリングでは人に話し掛けるというのが楽しみのひとつで、情報獲得の手段でもあります。

旅の役立つ情報は旅先で獲得するのが1番いい。10年ほど前まではインターネットなどの情報源もなく、パソコン通信で談話をする程度だったので、やはりとにかく現地に行ってみるというスタンスは行動力の象徴だった。

「大沢温泉がいいよ」と運転手さんが教えてくださったのでそちらに向かうことにした。昔ながらの湯治温泉で一軒宿である。宿泊をするかどうかで迷ったが、いわゆる番頭さんらしき旦那さんもバイクに乗るという片言の会話で安心感が出たこともあり、2000円払って泊まる手続きをした。

旅館の廊下を歩きながら、ここが有名な「大沢温泉自炊部」であるのか、と思うと、あとになってから満ち潮のように感激がこみ上げた。不安と好奇心が入り交じっているところで、今では滅多に味わうことのない不安と動揺だった。時代を2、30年遡るような建物の中で湯治客が行き来するのを見ていると、長い湯治の文化を感じる。ぽつんとある売店。活気が出たり急に静かになったりしている。

周囲がガラガラと開け閉めする戸で囲まれた8畳ほどの大部屋で蚊取り線香に火をつけて寝ころんでみた。台所に行けば10円を払ってガスコンロに火をつけ湯を沸かす。湯治客のおばあさんたちと会話も弾んだ。おすそ分けも戴いた。

そうそう、タイトルに書いた「ひっそり」の意味を説明しなくてはならない。それは、温泉場がひっそりと佇んでいるという意味もあるが、お客さんに若い女性がけっこう混じっていて、暗闇の中で無言で服を脱ぎ「ひっそり」と湯に浸かっているのである。せせらぎが人の気配の雑音を消してくれる。

人がざわついた雰囲気がなく、遠くでほのかに灯された明かりがお湯まで届いてくる。自然の姿が持っている夜空のほんとうの明るさを、湯舟の中から見上げ、人が生まれたときのように男女の隔たりなく湯に浸かる。

無言が続く。だから「ひっそり」である。

2006年4月22日(土曜日)【花も嵐もI】'05年編集版



第8話

ソロの娘さん・八幡平　＜東北＞

もう少し東北の話をして。その後、少しずつ南下したいと考えています。しばらく東北にお付き合いを。

東北を走ると必ず北海道を目指して北上する人に出会う。皆さんの心にある東北はついでに通るだけである。魅力ある北海道を何も否定はしないけど、折角、東北を走っているんだから、ついで意識は棄て、東北の素晴らしさを味わって欲しい。

東北といえば八甲田や蔵王と並んで八幡平がある。ここで出会った女の子の話をして。

その子は大学生くらいの子で、相棒の女性と二人で京都を発ったという。でも、二人だと意見が一致しないことがあるらしく、今夜のユースホテルだけを決めて別行動になったらしい。

八幡平から岩手県の雲海を見おろしている彼女の脇を、ちょうど私が通りかかり、ディバージョンという珍しいバイクに乗っていたこともあって、後ろ姿に声を掛けたのだった。

「どちらから？」

「京都の北区からです」

4月に免許をとって、早速、北海道へということらしい。もしも私が彼女と同年代ならもっと胸をときめかせて彼女を知りたがるだろうが、離れているし、そこは一人のツーリストとして旅の挨拶を交わしたのでした。

ソロツーリストにはソロの掟のようなものがあって、名前も聞かないことだってあります。でも、家に帰ったところに彼女のことを探したくなってくるのだった。

昔、プロポーズ大作戦というテレビ番組があったなあ、と懐かしみ、日記を書きながら思い出しました。

2006年4月23日(日曜日)【花も嵐もI】 '05年編集版

第9話

もっとこちらへ 夏油温泉 <東北>

山深い所にある温泉だった。尾根と谷を幾つも越えたら古ぼけた湯治旅館が軍事収容所のように並んでいた。湯舟は旅館の一番奥にあった。

混浴なので、脱衣場には男も女も入り混じっている。しかも湯舟との仕切りがなく、服を脱いだらそのまま湯舟へ向かって進むと風呂に浸かれる。

湯舟は長方形で、45℃くらいあろうかという熱い源泉が流れ落ち、ゆっくり脱衣場のほうに向かって流れている。だから、まず掛かり湯をするときのお湯は一番温いお湯なのです。

ところが、元々熱い湯が流れ込んでいるのを知らない人は「あららら」と驚き周囲を見回すことが多い。どこかに温いところがあるのではと思うのだろう。

そこで、「あらら」と思った女性と湯舟の片隅にいる男性と視線が合う。もちろん私とも視線を交わすが、湯治になれている男性がいて親切にも対岸からしきりに声を掛けてやっている。

男性が

「もっとこっち。こっちの方が温いから」

といって上流のほうを指さしている。教えてもらった女性は、無言でそちらに移動する。

「もっとずっと奥の方よ」と男性が言う。

「ほんとうですかねえ」と女性が呟く。

そんなことを繰り返しながら女性は男性の言葉を信じ、上流の方に屈んだまま小刻みに蟹のような横歩きをする。行く方向が意地悪にも上流なのだから、お湯が温くなるわけがない。逆に熱くて入り辛くなってくる。

どうしてもアソコを隠すタオルを持つ手が疎かになり、対岸の方に腰掛けた私からは、見てはいけないものまで見えてしまいそうになる。というかマル見えになってしまっていた。

男性が彼女と知り合いだったのかどうかはわからないが、そういう雰囲気がいや地悪だというまえに、会話自体が浴場の雰囲気を非常に和ませてゆく。罪が多少あったとしても終いには許し合えているのだ。

人間が自然に還ればこういうふうに振る舞い、一緒に湯舟に浸かり、身も心もほんとうの意味で清くなり、病も直り、ストレスも消え去ってしまうだろう。夏油温泉までの山岳道路は、狭くて長い。自動車が少ない時代はそれはそれは途轍もなく秘湯だったことだろう。

人は、人と暮らし、大勢で社会を築き、利害を対立させ、いがみ合いをし始めたころから侵略という概念を持ち始めたのだとすれば、この湯治場の建物の中を通り過ぎるとき、時空を越えてユートピアに降り立ったような錯覚に私は襲われた。

湯の効用や知名度などとは別に私はこの湯舟での出来事が強烈に印象に残り、ますます東北の温泉ファンになっていってしまうのでした。

2006年4月25日(火曜日)【花も嵐もI】 '05年編集版

第10話

桧枝岐通過の秘話＜福島県桧枝岐＞

新潟県の小出地域と福島県の桧枝岐地域を結ぶ国道は、桧枝岐という集落を通ることで知られていて、この区域は新潟から福島に行くツアラーにとっては非常に魅力を感じるルートである。にもかかわらず実際には、この国道はバイクの通行が禁止されているのです。そこをある時期に通過したことがありました。

その当時のツーレポには、この一部始終を明確には書かなかったが、実をいうと少し禁止区間を走ってしまっていたらしい。お巡りさんが見て見ぬふりをしてくれたのだ、というような表現も適切ではないものの、秘術を使ってトンネルを通り抜けることができたわけである。

通行禁止区域入口近くのガソリンスタンドのおじさんに通行止のことを尋ねると、「仕方ないねー」というように言葉が濁してしまう。

一箇所の人だけでなく何箇所かで「どうしたものか」と尋ねてみると、悩みの相談を投げかけられた人のように顔をしかめて、しばらくして、行政が決定しているその禁止区間のことを棚にあげて、ほとんどの皆さんが具体的な方策を話してくださる。

行政は何故にこの区間を禁止にしているか。それは、実際に走って行政側の立場で考えれば明確に見えてくる。しかし、走り終えて庶民の立場になって考えた場合、行政指導者の考えが如何に庶民から遠いものであるか、というやり場のない思いも湧き上がってくるのでした。

この道路を通行禁止にしたら事故や危険は確実に減る。人間が工夫をし合い自分達の住んでいる所を住みよくしてゆくのだ。みんなのために生活を向上させて、発展させていこうじゃないか。そのような前進的な生活への挑戦が少し足りない。

いくら事故が減ってくれたとしても、知恵を出し合い工夫して住みよくする共同作業の部分を放棄してしまったことへの残念無念さが残るのだ。道路は誰のために造ったのですか、と走りながら私は思った。

桧枝岐にやってきて、尾瀬沼への入口に車を止めて登山に向かう人たちの群れに出会う。自然愛好家で、インテリジェントで、リッチな都会の人々が、大自然の中に車を放置して尾瀬の中に歩き出してゆく。おそらく、ブランドの登山用具で身を固め、都会風の言葉で会話を交わしながら、長蛇の列を成して沼の遊歩道を歩いているのだろう。結局は「得て勝手」の世界なんだ。自分だけが楽しむのだ。

いっぱい人に溢れた尾瀬沼の風景を想像してみながら、一層のこと、上高地のようにすべての道を通行止めにすればいい。そんな皮肉なことまで思いながら桧枝岐を通過した。

夢とロマンが満ちていた尾瀬であったが、湯野上温泉に着くころには、私の頭の中からすっかり尾瀬への憧れや興味が消えた。

もしも尾瀬や桧枝岐にその土地の精がいるならば、大勢の文化人が群れる風景をどのように感じるのだろうか。

どれだけ環境保護を大義名分に挙げて、あるときには文化的なふりをして、実際はまさに侵略の風景でしかないのだ。これ以上夢を奪い取られたくない。しかし、今度来るときには、きっと道幅がさらに倍近くになっているのだろう。車は増え続け駐車場は整備され、観光バスが溢れている。

悔しい限りである。

2006年4月26日(水曜日)【花も嵐もI】'05年編集版

第11話

感動の車窓の娘さん＜六十里越街道＞

忘れもしない。1994年の夏に東北ツーリングをしたときの話です。

六十里越えの街道を会津に向かって私は走っていました。山深く寂しい峠越えです。

汽車の線路がそばを走っていました。しばらく行くと、私と並ぶようにディーゼルカーが追いついてきました。バイクの方が速いときもあれば、列車が私を追い抜いて行くときもありました。

ふと、背よりも高く生い茂った雑草の向こうを走る列車の窓に、若い何人かの女の子たちの姿が見えました。誰が乗っているのか、どんな人なのかということなど、私は関心に持っていませんでした。

ところがそのとき、道が急坂道になり、ヘアピンカーブに差し掛かるとバイクの速度が少し落ちました。これから峠の上へと一気に登って行こうというとき、カーブが一番きつくなっている。偶然にもちょうど、窓に手が届きそうなほど列車が近づいてきていました。

まさにそのときに、乗り合わせている人たちの顔が、私にはっきり見えるほど近づいた一瞬がありました。

「みんなキャンプに行くのかな」という思いが閃いた瞬間、車窓の向こうからこっちを見つめるひとりの女の子が、手を肩のあたりまであげて、そっと振ってくれたのです。はにかみながら...

しかし、私には返事をする暇がありませんでした。バイクは木だちの影に隠れてしまい、列車はトンネルに入って見えなくなっていました。

手を振ってくれた理由は、ほんのひとときでも、峠道を一緒に走ったという出逢い、そしてそれに別れを告げる儀式だったのかもしれませんが。そのときの彼女の顔を、私は忘れないように誓いました。

彼女は、きっと旅人でした、旅の仲間を意識していたのかも知れません。恥ずかしそうでした。かすかに微笑みながら、躊躇がありました。きっと思い切ったのことだろう、手を振ってくれたのだろうと思います。

視線と視線が触れ合った瞬間に急いで手を挙げた彼女にむかって、何の返事もできずにずっと離れて行ってしまわなければならなかった私は、どんどんセンチになってゆきました。ひとりごとを繰り返し、しばらくの間、自分を失ってしまってホロホロとしていました。短かったけど美しい出会いであり、悲しい別れでもありました。

六十里越の街道を走ると、ディーゼルカーのあの影と悲しい別れを思い出します。暑い暑い夏のできごとでした。

2006年4月27日(木曜日)【花も嵐もI】 '05年編集版

第12話

ぶどう峠～御巢鷹を望む＜上信＞

1995年の夏に武道峠(ぶどう峠)を越えた時のことです。

日本航空のジャンボジェット機が墜落したのがこのぶどう峠から望める御巢鷹山でした。

たまたま10周年に私はこの峠を越えました。そんなことで関係者や報道陣が溢れているのに遭遇します。

家を出発する前にこの事故の関連するドキュメンタリーを読み終わっていたこともあって、事故の内容と目の前の風景が一体になって、無関係な人間でありながら心にズキンとくるものがありました。バイクを止めて思わず峠で合掌をしているのです。一人だと心に淀みや嘘がないのだなと感じます。

峠からの景色は素晴らしく、きちんと綺麗に植林された山並みが幾つも重なりその向こうに御巢鷹山は見えました。恐怖の数時間の間に考えたこと、大多数の方々は思い浮かんでくるのが子供のことだったのであろうなと思います。もしも私があの飛行機に乗っていたら何を思いどんな行動を取ったのだろうか。

信州と関東は、山ひとつを隔てて隣同士だということに改めて気が付きます。この峠を越えるだけで関東平野に行けてしまう。だから、幾人もの関東ナンバーに出会う。ああ、遠くまで走ってきたもんだ、という感動がじわっと襲ってくる。こんな奥深い山の中に投げ出されたときに、微かでも意識が残っていた人はさぞかし無念だったことでしょう。

JAL123便の皆さん、安らかに。私が峠を越えてゆく間に何台ものツーリングライダーとすれ違う。若いツーリングライダーの中にはこの事故が歴史となってしまってから生まれたという子もいることでしょう。

伝えることに尻込みをしてはならないのだな、と思う。いつ、どんなときでも、どんなことでも。

峠に魅せられて <奥飛騨や信州>

私のバイクには速く走るための性能は不必要です。旅を楽しく愉快にできるための性能のほうがむしろ大事です。オートバイに乗っている友達のみなさんには、バイク＝パワーだ、という人もあるんでしょうが、自分のバイクの馬力を今だに知らうとしない私ですから、ほどよい馬力があれば、あとは信頼して走れる品質と疲れずに走れる安定感が重要となります。

法定速度より少しのろいめで走ることが多いため、私と同じようなツーリングスタンスの人にはトップギアでアイドリングの2～3倍の回転が保てるバイクをお薦めしています。そう考えると、私の乗るに相応しいバイクは、250CCから500CCくらいのもものとなってきます。

ぶっ飛ばすだけでなく、その土地の空気を思う存分味わったり、景色を心ゆくまで眺めてられるような峠が信州にはたくさんあります。そういう峠をノロノロと、時には少し飛ばすことがあっても、ほとんどは風景を堪能したりしている時間です。峠を駆け上って展望所で佇み、少しひとりごちてみるのも気分爽快です。

峠から更に尾根を伝って歩き回ってみたり、湿原や高原を散策するのも楽しい。もちろん谷間の出で湯に浸かってリラックスするのもいいですね。

旧街道や歴史古道があれば、私は惜しまず歩きます。重いなと思っても必ずカメラを持って行きます。奈良や明日香といった古都の史跡も好きですが、信州に出掛けて、苔蒸した道しるべや地藏さん、道祖神さまに出会うのも楽しみのひとつです。

気に入ってしまうと同じ場所でも何度でも出掛けてゆきます。大きな山脈の峠でしたら分水嶺になっていることもあります。日本海と太平洋に一筋の水が分かれてゆくというドラマティックなところにも惹かれます。

信州の峠を思い出せば限りないのだけど、ツーリングという楽しい旅の世界へと誘ってくれたのはこれらの信州の峠の数々でした。

第14話

コスモス揺れる・無言館 <信州>

長野県上田市の郊外に「無言館」という戦没画学生慰霊美術館があります。今では新聞や雑誌などで紹介されてすっかり有名ですが、私が初めて訪れたときは開設後一年余りで、人影は疎らでした。

この美術館は、村山槐多らの作品を集めている「信濃デッサン館」の窪島誠一郎さんが私費を投じて分館として建てたといえます。画家を目指していながら戦争によって命を絶たれてしまった人たちがいました。彼ら彼女らは、志を半ばにし国家の犠牲になっていったのですが、そんな人たちの生前の足跡を追い、館長の窪島さん自身が全国を巡って集めた作品を展示しています。

建物はコンクリートを打ちっぱなしにしたような質素なデザインで、美術館の周辺も近代的な塀で囲まれているわけではなく、雑木林に埋もれて丘の上の森の中にポツンとありました。

あと十分、あと五分と時間が迫る中で描いた恋人のポートレート。戦争から還ったら続きを描くから、と言って出征した作者は戦争の犠牲になって還らぬ人となってしまう。

絵画はもとより手紙、画具、写真、死亡通知なども展示しています。それらの作品や遺品は生きており、若々しく逞しさが漲っていました。それは確かに未熟かも知れないけれど、作品を絵描くことへの情熱を感じます。

見学者の中にはその作品を「重い」という人があるそうです。しかし、この程度で重く感じではいけない、もっと事実を見つめなきゃいけないのではないかと私は思います。

母や妻、あるいは友人などの手により絵画は家の奥深くにしまってあったことでしょう。もう二度と取り出して見ることもないかもしれない。でも、心の片隅にしまいこむと同時に、実像として残すことがひとつの使命であるのだ、と諦めきったように暗くて冷たい場所で時間が過ぎるのを待っていた遺品たち。それらが光のあたる美術館へと出てきたのです。

すべてがかなり損傷しています。絵の具が剥がれ落ちている。綺麗な額縁に飾られてはおらず、質素な枠に支えられ冷たいコンクリートの壁を背に掛けられてある。つまり、これこそが作品の持つ主張であり彼らが本当に訴えたいことなのかも知れない。死んでいった画学生の息づかいが届いてくるような気がしました。

コスモスを優しく揺らす風が吹くころに、私はここを訪ねた。太平洋岸の平野では稲刈りは終わっていても、ここ信州の塩田平を見下ろす高台からは、黄金色の稲穂が、大海に波打つうねりのように輝いている景色が見下ろせる季節だった。

2006年5月4日(木曜日)【花も嵐もI】'05年編集版

第15話

利賀村への道　＜奥美濃＞

富山県に利賀村というところがあります。

その蕎麦は格別に旨いのだという話をバイク仲間から教えられて知ってしまった私は、ずっとそこに行くチャンスを伺っていました。1992年の10月31日の朝、ふっと天の知らせがあって、テントなど一式とパンツを3枚を持って家を飛び出しました。

久しぶりの奥美濃でした。少しずつ道路が広められて、集落をバイパスするルートなどできて、奥美濃は開発されつつあるのを感じながらの旅の始まりでした。

初めてこの地を訪れたのは1980年代の半ばころだった。平村には一軒のガソリンスタンドがありまして、そこで中学生ほどの可愛い娘さんがお店を手伝っていました。

久々にこの村に立ち寄ってみると、あのときの中学生が、子供さんを連れながらあのときと同じようにお店を手伝っていたのです。大きくなっていて驚かされました。実家の稼業を手伝いにきてるんだな、って思いながら、幾つかの思い出の余韻を胸に、私は利賀村への峠へと向かいました。

※これを書いている2005年にはその子どもさんも成人していることだろうと推測できます。

利賀村への峠は「山の神峠」といいます。このころの峠は、現在と違って旧道の凸凹ダートの道です。

おまけに奥美濃街道を北上してくる途中で雨が降り出し、山の神峠の中腹で雨足が最高潮を迎えていました。利賀村に降り立ったときにはもうヘトヘトで、身体も冷え切ってしまっていた。蕎麦を食べる「ごっつお館」などが天国に見えたのを思い出します。その天国に見えた蕎麦屋も閉店間際だったのですが、色々と無理をお願いしてお蕎麦を1杯食べました。

蕎麦屋の前は小さな広場になっていて、トイレと背中合わせになっている休憩小屋が一軒ポツンとありました。

あっという間に日が暮れてきましたので、あの晩はこの休憩小屋で野宿をすることにしました。雨足は衰えることなく、バシバシと屋根に打ち付けてくる雨粒が恨めしかった。せめてもの救いは、建物もトイレもとても綺麗だったことです。出来る限り屋根の下までバイクを引き込み、小屋の中の木のベンチで寝ました。

朝、目覚めると夕べの雨が雪に変わって、村を取り囲む山は真っ白でした。村の人に尋ねて檜峠の方を目指しました。

まず牛首峠に向かって行き、道路工事中で指示で、途中から檜峠に方向を変えるルートを取りました。峠道は凸凹というだけではなく、電車の線路にあるようなバラストが一面に撒かれていて、タイヤが空転して坂道を登らない。見る見るうちに尖った石でタイヤが傷だらけになってゆくので、パンクやバーストの心配もしながらの峠越えです。タイヤは新品だったにもかかわらず不安は募りました。谷の向こうの尾根の彼方まで峠道は続いていました。果たして行けるのだろうか。

あの峠が牛首峠だったんだということは、随分とあとになって地図を見て気が付きました。

檜峠は紅葉の真っ盛りでした。一部でダートが残っていましたが、牛首峠と較べたら凸凹はまったくありませんでしたので走りやすかった。

苦難や不安が多かっただけに、思い出深いツーリングとなりました。オンロード車だった私のバイクですが、これを機会にダートを走るようになり、テント持参でのキャンプツーリングも定着してゆきます。

あのころ、利賀村へと通じる道路はすべてがダートだったんです。そんな村がひとつくらい、日本のどこかに残っていて欲しいなと思います。

2006年5月7日(日曜日)【花も嵐もI】'05年編集版

第16話

タラの芽　＜奥飛騨にて＞

ゴールデンウィークの天気は、西の方から低気圧が移動してくることで雨と晴が交互にやってくる。教科書通りに天気概況が変化してゆくので有り難いけど、長い旅を続けるツーリングライダーは、旅の途中で必ず雨に遭遇することになる。

昔、信州を旅したときにこの雨を避けて東へ西へ、南へ北へと広い地域を行ったり来たりしたことがあった。あとで思い起こせば、無計画な旅だからこそ、朝の空模様を眺めて行先を決めてやればいい。ここに無計画でひとり旅の醍醐味があるといえよう。

まったく予想もしていなかった観光地や温泉地の情報を教わって、突然立ち寄ったこともあった温泉などが思い出深くなることもある。まだひとり旅を始めたばかりのころのことだ。

三寒四温といわれる季節は過ぎていても、信州あたりではまだまだ寒い日がある5月の初旬である。高山植物や草花は、まだツボミで新芽も硬かった。融雪が進まず幹線であっても路肩の土砂が崩れたままの峠も多く、通れたとしても補修工事中有ることがある。

卒業以来で、会えば久しぶりになる友人が奥飛騨の五箇山ユースホテルに泊まるという連絡をくれたので、懐かしさのあまり会いたくなった。私はそのときに甲州を旅していたのですが、一夜明けて奥飛騨へと向かおうと決心を変えていた。

甲州街道を通って諏訪湖岸へ。そして松本盆地から平湯峠を越えて飛騨高山へと急いだ。高山市から白川郷方面へは天生峠を越えることにした。

五箇山までの最後の峠である天生峠には、断崖絶壁の下に転落しそうな危険箇所が数多い。そこを必死の思いで回避して走ってゆく。

合掌づくりの里を見おろせる谷まで降り立ち、ほっとひと息をつく。五箇山ユースホテルまであと数キロという山村道で、道脇の斜面にひとりの女性の姿を見つけた。

「何をしているのですか」

と声を掛けた。

「タラの芽を摘んでるんです」

という。

ぽかぽかと柔らかい日差しの中で、たったそれだけの会話だったが、それが私のタラの芽という美味なるモノとの初めての出会いだった。これをきっかけに春になると、私はタラの目を摘みに出かけるようになる。旅をするときに、小さな自然に目を向けるような余裕が芽生えたのだ。

もしも、彼女に声をかけなかったら、私は「タラの目」という春の味覚にも出会えなかっただろうし、自然というものに目を向けることもしなかっただろう。

たったひとりの女性が、自然と触れ合っていた姿が刺激を与えてくれたことになる。

「多くを摘まないで、必要なだけ摘んでゆくんです。あとは来年の芽になりますように。」

そう、静かに、ニコニコと話しながら、芽を摘む愉しさとそれ自体の美味しさを私に教えてくれた人は、ガサガサと斜面の茂みに踏み込んで、藪の向こうに消えて行ってしまった。

2006年5月9日(火曜日)【花も嵐もI】'05年編集版

第17話

水沢のうどん小野上の湯　＜上州＞

誰に教わったのか記憶にない。水沢というところがあってうどんが美味しいと言う。

そこで、好奇心に逆らうことなく、水沢へうどんを食べるために立ち寄った。1996年の東北ツーリングの途上のことだ。

道端の屋台のようなところでとうもろこしを焼いて売っているおばさんがいたので話しかけた。

「水沢で一番美味しいうどん屋さんを教えてくださいませんか」

と私が尋ねると、

「水沢のうどんはどこでも美味しいけどねえ」

と言いながら、

「若い人だから量が多いところがいいでしょう」

と、まるで母か私に説教をするような面持ちで一軒の店を教えてくださいました。

「山一屋さんと言うんだよ」

上州の人は少し言葉の語尾に訛りがあるようで、優しさが伝わってくる。

教えてもらって入った店は、結果的に大満足であった。大食いの私にとって、麺の量に不足はなく十分だったし、味も良かった。醤油の味がいかにも関東らしかった。そして何よりもオヤジさんを気に入ってしまった。

「旨いうどんですね、ダシ、少し醤油の匂いがします」

と私がいうと、みりんと酒と醤油を混ぜて、秘伝の細工を加えて、しばらく寝かすのだそうである。この出来上がりを専門用語で何とかというらしい。蒔蓄も聞かしてくれた。寝かせると醤油の匂いが取れるなど、ダシの講義まで受けた。このころは

ちょっとしたグルメがマイブームでその話も耳慣れていたような気がしてメモしなかったのが残念だ。

しかし、十分に満足して店を出た。「なかなか意気のいいオヤジさんだったなあ」と、しばらくの間、得した気分で満杯だった。

そのあと、小野上温泉に寄って湯に浸かった。

一緒に湯舟に浸かっている爺さんに、私が

「30年のリフレッシュ休暇で旅に出てきたんですよ。水沢のうどん屋さんでこの温泉を教えてもらって来ました」

と言うと、自分は

「毎日が暇でなあ、こうして温泉に入ってるんだ」

と大声でこたえてくれる。すると隣に浸かっているもうひとりの爺さんが、

「家族のおかげで30年やって来れたんだ。感謝しろよ」

と私に向かって言う。

定年を過ぎた爺さんたちが、私に嫌味もなく、和やかに説教をする。会話はそんなペースで進み、年寄りの昔話に相槌をうちながら湯に浸かっている。

もっともな話が多いし、ユーモアが溢れていて説教も悪くないぞと思う。

それは、説教する人が親身になって、大らかに小言をいうからだろう。聞くほうもストレスを感じることなく、魔術にかかったように素直に頷いていた。

2006年5月13日(土曜日)【花も嵐もI】'05年編集版

第18話

一里野温泉の熊さん <越前>

奥飛騨を経て能登半島に行こうとしたことが一度あった。しかし能登は遠い。奥飛騨を経て行くと少し遠回りになるのだろう、余計に遠く感じる。この話は能登までいけず「一里野温泉」で断念したときのことである。

あの日は能登まで行けずに引き返してきたので、やや消沈気味だったかもしれない。温泉の近いキャンプ場もなかなか見つからない。「ゼロの焦点」（松本清張著）の舞台となった鶴来町を通って、更に南下しながら温泉が湧いていそうな谷を伝って野営場所を探し続けた。

夕闇が迫るころに一里野スキー場の管理事務所までやって来ていたので、この一角でテントを張ることにした。

面白いことはいくつもあるが、二つほど紹介しよう。

まずその1話。

テントの前にあった公衆電話に若いカップルの乗った車がやってきて、女の子が電話を掛けている。

「ねえ、〇〇子、私、まだそこにいるって、私のお母さんから電話があったら言っといってくれるう。今まだ××高原にいるの」

おいおい、可愛い声してねえちゃん、ここは××高原じゃないよ。親も騙す上に友達も騙すのかい。私は心の中で叫んでしまった。ほんとに最近の子はねえ、と思ったものだが、近ごろはこの程度なら普通らしい。

次にその2話。夜も更けたころ、スキー場の緊急連絡用のスピーカーに村内放送が響く。田舎に行くと電信柱などに備え付けのスピーカーがあるところが多く、この村も例外なく設置してあった。

「村内の皆さんに連絡します。近ごろ親子熊が出没しております。外出の際には十分お気を付け下さい。」

そんなこと急に言われても困ってしまうじゃないですか。私は既にスキー場にテントを張ってしまっただからです。

その晩、テントを出てオシッコに行くにもどれほど気合いと勇気が必要だったことか。

「ツーリングに来てスキー場で野営していた男性が、深夜オシッコに出た際に熊に襲われました」なんていうニュースで名前を出したくない。しかし、我慢はできないので「どうぞ熊さん出ませんように」と心の中で叫びながらオシッコをした。

だが、怖くて早く寝ようと思いたくさんビールを飲んでいたので、オシッコはそう簡単には終わらない。

怖い夜。

2006年5月16日(火曜日)【花も嵐もI】'05年編集版

第19話

木曾馬牧場の岡さん　＜開田村＞

木曾は山の中だった。一度行って気に入ったので何度も行くようになった。

その中でも、毎年、蕎麦を喰いに出掛けるところに開田村というところがあります。木曾馬を保存するということで、全国的にも注目を集めているらしい。

木曾馬は昔から日本の農耕に寄与してきた馬だそうで、馬の種の保存が危ぶまれている昨今であるから故に多くの人に木曾馬を理解してもらい、積極的に保存していこうという試みを村をあげて実践しているらしい。

岡さんという女性がいろいろと説明をしてくださった。何故名前が分かっているかということ、後日、テレビなどの取材があって出演しているのを見かけたからです。

彼女は東京方面の大学の出身者で馬術部の経験があるらしく、こよなく馬を愛する人だった。木曾馬の保存のためにということでこの村の役場に就職したのでしよう。

馬が好きなのが手に取るようにわかる。さわやかな口調で馬の説明をしてくださった。人懐っこい感じなのでさぞかしモテることだろう。とても可愛い。昔風に言うとチャームングな女性でした。

当然、その後も、彼女に会いに、否、何度も馬を見に開田村に出掛けて行った。

あるとき、岡さんに

「このここにいる馬は、幸せなんですか。観光客を背中に乗せて歩き回ることが幸せなんですか」と尋ねた。

思いつきでちょっと意地悪な質問をしてしまったが、彼女は私の質問を噛みしめるように考えたあと、情熱を秘めて馬の話を語ってくださった。

「馬は働くためにこの世に生まれてきたわけです、種を保存して行くことは大事なことです。」

そんなことを話してくださった記憶がある。

ほんとうに木曾馬が可愛いがっている姿が良かった。ぜひ、木曾馬牧場に行ってみてください。可愛いから。ええ、岡さんもですが、木曾馬も。

ここまで書いて、そういえば、岡さんの姿は最近になって見かけなくなってしまったなあ。どうなさってるだろう。元気だろうか。

開田村は、お蕎麦が美味しいので食べに行った際には、ぜひとも牧場にも寄ってみてください。

2006年5月20日(土曜日)【花も嵐もI】 '05年編集版

寂しい風になりたい　＜紀州山中＞

初めて紀州を旅した時のことです。潮岬の国民宿舎でちょっと珍しい人と同宿になりました。その人は、初心者の旅人である私を刺激しました。

スーパーのバーゲンで飛び切り安い自転車を買って、それでサイクリングをして潮岬までやって来たというのです。チャリダー(自転車旅人)は、有名なメーカーのサイクリング車に乗っているのが普通で、荷物の積み方もサマになってカッコいいなあと思っていたので、ごく普通の格好で旅に来ているチャリダーさんに出会ったときはある種の驚きがありました。

話をしていると、彼はコックさんということがわかってきます。シベリア鉄道に乗ってフランスへ渡り、コックさんの修行を何年かして、国内のフランス料理店で働いたきた経歴があるらしい。

お店を辞めてきたのか、休暇を取ってか、何か深い理由があつてのことか、そのあたりをチラチラと話してくれるのですが、とにかく、紀州へのこの旅は無計画にひょいと家を飛び出して来たらしい。

80年代前半のころには、貧乏な旅人が多かったが、ここまで無鉄砲な人は珍しかったかもしれません。

そのとき、私は初めての紀州への旅でした。そんな旅で出会った人がこういう刺激的な人だっただけに、私の紀州での旅は思い出深いものになりました。

引牛越、牛廻越、野迫川村、龍神スカイライン、大塔林道…。どれも今となつてはオーソドックスな場所ばかりですが、全国にも誇れるほど素晴らしいツーリングルートとして旅雑誌などにも紹介されている。世界遺産になってしまったのでちょっと心配な面も出てきているものの、山岳林道も多く、オフローダーには楽しい地域です。

これまでに何度もここを旅をしてきました。同じ道を走るのですが、その都度新しい感動が得られる所です。

龍神村と十津川温泉を結ぶ峠の途中に、ひっそりとした集落があります。秋に訪れると干し柿が(吊るし柿が)軒先にたわわにぶら下がっている。それを見上げることのできるような広い路肩があって、たまたま私はバイクを止めて佇みます。

民家は、急斜面に数軒だけ散在して建っていて、屋根の上に隣家の庭がある状態です。村の片隅によそから来た通りがかりの私が居ることが不自然な感じがする。

しかし、落ち着きます。村の静けさと懐の深さのようなものを感じながら、そこに佇んで居たいのです。

村民運動会の案内のポスターが張ってありました。どんな子どもたちが、どれくらい集まって、どんな競技をするのだろうか。ものすごく興味が湧きます。

そのポスターを見て以来、秋になると狙って出掛けて行こうと思うのですが、用事が重なって延び延びになっているのが悔しいです。今でも廃校にならずにあるかな、あの学校。

2006年5月23日(火曜日)【花も嵐もI】 '05年編集版

第21話

ひよいと四国へ　＜四国＞

種田山頭火が詠んだ句がある。

ひよいと四国へ晴れきつてゐる　山頭火

私も、まさにそういう気分で徳島へと上陸したことがありました。

初めて行った四国の旅では、どこに行くかという情報をまったく持たないまま和歌山から船に乗ります。

フェリーの中で色々と話の相手をしてくださったご婦人から「剣山」を教わりました。

まずは国道439号線で西へと向かいます。

国道439号線は「よさく国道」としてもその名が有名です。

走り始めてみると思ったよりも険しい道だったのでドキドキしながら走ったのを思い出します。

別の国道へとそれて土須峠を越えて、剣山スーパー林道に少し踏み込んだりしながら、剣山の東側から南側へと山を越えてゆきました。

山の景色が素晴らしいので随分と道草を喰って走りました。

テントを張れるところを探しながらどンドンと走って、遂に海岸まで辿り着き、日和佐駅で寝ることになってしまいます。

野営をするのも駅で寝るのも初めての経験でした。

真夏の旅だったので、明かりに虫が集まり、蚊に刺されながら眠ろうとしました。

ホームのベンチへ行ったり待合室のベンチへ移動したり、駅前のロータリーの中の

芝生で寝てみたりして、時間を過ごすのに苦心をしました。

枕元を沢蟹がサラサラと歩き回っていたのを覚えています。

眠れぬ夜に、それはもう終電が行ったか、もうすぐ来るか、そんな時刻に、バイクの若い子がひとり、駅にやって来ました。

少し話をします。

暑いので夜に走ることが多いという。

既に横になって眠ろうとしていた私とどれだけ話していただろうか。

先に私が眠ってしまいました。

夜中に一度、目が覚めたときはまだ近くで寝ていたのに、朝、起きたらもうバイクもその子の姿もなかった。

まだ夜が明けない時刻に、ひとりひっそりと旅立って行っただろう。きっと、私を起こさないように静かに、バイクを押して駅を離れていったのでしょ

う。

私のタンクバックにメモが挟んであって「お先に…」と書いてあった。
粹なことをしてくれるもんだ、旅人さん。

そんな切ないことがありました。

その子のこと。

就職が決まって、来年（93年）から近畿日本ツーリストに行くのだって言っていたような気がする。

きっと素敵な旅の案内人になっていることでしょう。

2006年5月26日（金曜日）【花も嵐もI】 '05年編集版

第22話

嵐に向かった土佐湾岸 <四国>

「夜になると、知らない街の様子が見えてくる」

なんて言って私は、自分のイメージを描きながら旅の出発に向けて高ぶりを維持します。

それは1992年の夏のことでした。

ネットで出会ったバイク仲間同士がが四国の或る場所で落ち合おうという話が持ち上がりました。ちょうどお盆を挟んで夏休みだった私は、一足先に家を出て、剣山周辺を堪能して、室戸岬を回って目的地の宿毛市を目指していました。

台風が来ていました。

このときのこの経験で台風発生時のツーリングに神経を使うようになりますが、このころは台風が接近していることに薄々気が付いていても能天気なものでした。。

宿を、室戸の北川温泉というところに決めました。そのうち四国から中国地方へと抜けてくれるだろう、安易に考えています。

午後一番くらいに宿にチェックインして、高校野球を見ながらリラックスしています。あくる日の朝になってもそんなに風も強くないし、集合日が当日だったこともあり宿を出ます。

ところが、この温泉地を出発してから高知市に近づくにつれて風が次第に激しくなります。そして、高知市から宿毛市に向かう途中あたりから雨が激しくなってくるのです。

いざとなったら駅に避難すればいいだろうと思いながらも、行けるまで行こうという判断で南へと走りました。

ちょうど台風が宿毛に上陸しようとしていたのだということは、風や雨がやんで一息

ついでから知りました。宿毛市に向かう国道から見える海の景色は、私の知っている太平洋とはまったく違っていました。

今、思い返すとあの荒れ狂う風雨はまさに地獄絵のようだった。車から降りた人がまっすぐに歩けないほどの強い風でした。気圧が下がってエンジンがアイドリングで停止します。止まらぬように回転を上げ続け、どこか避難できる場所がないものかを探しました。

しかし、バイクを止めたとしてもバイクが強風で倒れますから置き去りにはできません。屋根のあるところや風を避けるような所も見当たりませでした。

走行を諦めて道路脇に止まっているワンボックス車も多くなりました。私だってどこかに止まりたいのですが、止まっても走っても何も変わらないのです。ならば...という判断で走り続けてたのでした。あとになって考えると、市役所のような公共施設の中庭などに避難できなかったのかと思いました。

必死になって集合場所の家に着いたときは、ほんとうに放心状態だでした。

暖かい風呂と皿鉢料理、鰹のタタキなどをそこでご馳走になりまして、そのおかげで台風一過のころには元気をすっかり取り戻せました。

再び帰り道もキャンプをしながら道草を喰って旅を続けることができました。四国は、割と狭い島なんですが、面白みがいっぱい詰め込まれている島でした。

ツーリングの楽しみは、スピードを出せる道があることや長い距離を走るばかりではありません。そのことを多くに人にも知ってもらうためにも、どうぞ、四国へ行って旅の楽しみに出会ってきて欲しい。

2006年5月28日(日曜日)【花も嵐もI】 '05年編集版

第23話

足音だけ一草庵（松山）　　＜四国＞

ゴールデンウィークに四国や九州を目指す人は多いと思います。神戸や大阪からのフェリーの満席率を聞くだけでそのことがわかる。

九州が良かったという人、四国が良かったという人に分かれるようだが、ツーリングの楽しみ方による違いが顕著に出てくると思う。

四国は周回をしてくるのではなく、山岳部、山間部に入って峰々を眺めながらのんびりするのが面白いと私は思う。平家の落人の集落という人もあるらしいが、山の峰々に張り付くように点在する家々には驚かされる。

種田山頭火の終焉の庵である松山市の「一草庵」を訪ねてゆっくり鑑賞しようと旅に出たことがあった。

松山市は正岡子規で有名で、俳句の盛んな土地でもあります。ところが意外なことに、山頭火については案内も乏しくパンフレットにも省略されているのです。でも、タクシーの運転手さんに尋ねたら教えてくれた。さすがプロだなと感心しました。

一草庵には、来訪した人がそれぞれの想いを綴ってゆくノートが置いてあります。

種田山頭火を訪ねて遠路を遙々ここまでやって来る人には、それぞれかなりの思い入れがあるのだなとノートを読むと感じます。一草庵は、観光ルートに紹介されているわけでないし、ここへ行きなさいと薦めてくれる人も少ないでしょう。自らの意志で山頭火の庵を訪ね来る人が大多数だろうから、思い出を書き込むノートを綴る人たちの言葉には情熱が籠もっている。感動が溢れている。もしかして感涙に咽びながら書いてませんか？ってのもあります。

私の念願が叶って一草庵に初めて行ったときは、カメラを持って庵の周りをぐるぐる回ったり、立ったまま垣根を見続けたり、空を見たり、腰掛けたりして時間をすごしました。暫く時を過ごすことに意義があったのです。

スタンプが用意してあることに気づきそれを是非押したかったので、バイクまで戻って地図と句集を持ってきて隙間にたくさん押しました。

普通の民家の間にひっそりと佇むのです。いかにも山頭火らしい。

濁れる水のなかれつつ澄む 山頭火

私の足音だけがコツコツとあたりに響きます。

2006年5月30日(火曜日)【花も嵐もI】 '05年編集版

第24話

何故、惹かれるのだろう　＜四国＞

四国を旅すると他の地方では味わえなかった様々な光景に出会うことができます。山村部を走ると信号の数が極端に少ないような気がするし、町工場の建物も目立たない。

その代わりに頻繁に細い道をお遍路さんが歩いてゆくを見かけます。空海の開いた道。白い装束を纏い片手に杖を持って黙々と歩く。ときにはよろよろと歩く人もあるけれど、そのすべてが絵になって美しいのです。ひとつの想いを胸に抱きながら、何か祈りを唱えてか、はてまた訳もなくなのか。歩く姿は人の原点であるのだなと気づかされます。

国道439の狭い峠道を幾つか越えて、次から次へと村を訪ねました。途中で雨に降られます。降り出した雨に合羽を着ようか着まいか躊躇している女性ライダーがいた。

「どこまで？」

て尋ねると、

「西海岸に出て大堂海岸ユースまで」

昔からの友だちと交わしている会話のようだ。ライダーたちは、気軽に声を掛け合い名前も聞かずに分かれてゆく。

寒風峠で、昨日のキャンプ場で言葉を交わした人たちと偶然に再会した。旅人の道筋は似かよっているので、途中で何度も顔を合わすことも稀ではありません。その日は朝から雨降りで、峠に辿り着いたら雨足が更に強くなり始めた。霧が流れてゆく方向にみんなが目指す「瓶ヶ森林道」があります。しばらく、霧に包まれた峠の小屋で一服した後、思いを決したように彼らは消えて行きました。

旅の途中の出会いは様々です。剣山林道で出会った若い男の子は、ハンドルにジュースの缶を縛り付けて灰皿にしていた。四万十川源流の道しるべの前でも言葉を交わして、川を遡って源流を見届けるロマンの話をした。

大雨の日、外はもう真っ暗闇になっている時間に、屋島ユースにグースというバイクで飛び込んできた東京からのひとり旅の女の子。

日和佐の駅で野営したときに、朝早く陽が昇る前だったので私を起こさないようにという気遣いで、タンクバックに「お先に」というメモを残して先に旅立って行ってしまった子。

日本中の何処のどんな場所を走っている人であっても、風を受けて走りながら感じているものは同じなんだけど、それを言葉で確かめ合うと感動があるのだ。

走っている旅人たちは純朴でほんとうにバイク旅が好きな人たちばかりだ。様々な波長がある楽しみかたがあるなかで、都会の街中ならば対立するかもしれないのにここでなら理解し合えるのが不思議だ。

ひとりで旅をする人たちは雨の日も風の日も自分と対話をしながらアクセルを握っている。

ひとりだけれどひとりじゃないのだ。

2006年5月31日(水曜日)【花も嵐もI】'05年編集版

第25話

すがすがしい風・美星町　＜岡山＞

四国から宇高連絡船に乗って岡山県にあがった時のことです。

瀬戸大橋の下をくぐる海岸沿いを西に走って倉敷から矢掛町、そして美星町へと、やはりあのときもあてのない旅でした。

美星町という町がありました。何て素敵な名前だろうか。結論を言えば特に何もないところだったのですが、町は低くて広い山々で覆われていて、素敵な道が自然な感じで延びていました。山陰へ向かう私が迷いながらにこの町に迷い込んでしまったのはとても幸運でした。

私が走ったのはツーリングマップルにも載っている広域農道の一部で、有料道路のように快適な道でした。

むやみに飛ばすことなどしません。田舎の道をそんなに急いで走っても、距離計が回ってしまうだけです。何の変哲もない景色が連続するところで、ゆったりとした時間を送りながら走るのは最高の贅沢です。

もちろん、誰にも逢わない。車にもすれ違わない。尾根の上をサーフィンで飛び越えてゆくように道路は延々と続いている。

落ち着いた景色を眺めていると、気持ちがだんだん落ち着いてきます。すると、だんだんスピードが緩み始めて、とうとうバイクを止めて山々や畑を眺めている私がそこにいました。

安野光雅さんの水彩画のようだ。南フランスのあの絵のような感じがしてくる。

こんな遠くまで来て、国道を逸れて無名の田舎に入って来て、バイクを止めて景色を眺めている私は、いったい何を旅に求めようとしているのだろうか。失恋旅行みたいじゃないですか。

2006年6月3日(土曜日)【花も嵐もI】'05年編集版

第26話

ひっそり・鎧駅 <山陰>

日本海の波の音には哀愁がある。そんな気障な台詞を呟いてみたくなる。山陰地方の鎧駅でのお話です。

小さな入り江を見下ろす高台で蒼い海に向かって立ってみて、私は、宮本輝の「海岸列車」のひとつの場面を思い出していました。駅舎から反対側のホームに渡ると海が真下に見下ろせて、曲がりくねった道がその崖の肌に一筋となって海岸まで繋がっている。コンクリートで整えられた入り江の一角に漁業協同組合の倉庫があります。小説で読んだとおりの風景でした。

山陰を語り始めれば、必ずこの景色と小説のことに触れてしまいたくなります。

「そんなにいい所なのですか」

と誰にも聞かれます。

「まあ、はっきり言って何もないけど」

そう答えることにしています。

ぼんやりと海を見下ろしながら、名も知らぬ花を眺めるわけでもない。ホームの上を行ったり来たりしたり、駅舎の広告の張り紙を見たりしている。

そうこうしているとディーゼル列車がやってきました。乗客が数人降りるだけです。反対側から来た列車と行き違いの儀式を済ませると、またトンネルに消えて行きました。

そして、なんとも言えない余韻がいつまでも続きます。

レポートはこちら

<http://homepage3.nifty.com/bike-tourist/tour-photo/yoroieki/yoroieki98.html>

2006年6月 4日 (日曜日) 【花も嵐もI】 '05年編集版

第27話

浜坂ユースホステルにて　＜山陰＞

浜坂ユースというところのお話をしよう。

萩を旅しているときに、美味しいホタルイカがご馳走になれるところがあると聞いて、私は何の迷いも持たずに浜坂ユースにやってくることになりました。ゴールデンウィークの移動性の低気圧は、九州地方から近畿地方に向かって1日がかりで移動します。

萩から浜坂までその雨雲と一緒に移動してきたずぶ濡れの私を、優しくもてなして下さった人がありました。それはこの新年度になって浜坂ユースに転勤してきたばかりのご夫婦でした。まず雨具を脱いで荷物を部屋まで運んだら

「とりあえず談話室にでも入ってほっこりしえくださいね」

と言って下さいました。

缶ビールを片手に畳に座った私に、奥さんがビールを飲むためのコップを差し出して下さる。ビール好きならご存知だと思いますが、缶ビールはコップに移して飲むほうが美味しい。何となくですが、アルミ缶の匂いのような味がするのです。そのことをご存知だったのでしょうかね、奥さんはップを用意して、ずっと私の前に差し出してくださったのです。嬉しかった。

おまけがありまして、ホタルイカの料理を小鉢で添えてくださった。居酒屋みたいですが、ずぶ濡れでへとへとだった私にとって、この上ないお出迎えをしていただきました。それ以来、浜坂ユースは私の常宿になってゆくのです。

ここの奥さんのこと。初めは近所の女子高校生が遊びに来ていて、そのお仲間かヘルパーさんだと思っていました。そしたら、奥様だったのです。ご主人もなかなか魅力的な人です。

諸寄の競りに案内してくださったこともあります。社交的で、地元の漁師さんなどとの親交も熱く、味のある人です。美味しい夕食をご馳走してくれるためにいろいろ思案してくれているんです。旅好きだそうで、ユースの職員になっちゃったらしいです。

あれから10年近く過ぎますが、今は退職されて、別の道を歩んでらっしゃるようですけど。

2006年6月 5日 (月曜日) 【花も嵐もI】 '05年編集版

砂の器の亀嵩駅へ　＜島根県＞

「砂の器」(松本清張著・原作、野村芳太郎監督)という名作映画があった。高校時代だから1972年ころだろう。伊勢市内でのロケもあって、地元でも少し話題になったのを覚えている。

島根県の亀嵩が重要な土地で、もちろんここでもロケもあったそう。亀嵩はこの映画で有名になったといっても過言ではない。もしもこの小説に出てこなければ、私は亀嵩を知ることなどなかっただろう。

1993年の日記には「朝、亀嵩駅に着いて蕎麦屋さんで食事をした」と書いている。知る人ぞ知る駅舎が蕎麦屋さんになっているところだ。先客が一人居て驚きいた。お店の人の話によると、映画を見て訪ねてくる人が絶えないらしい。

700円の蕎麦定食を注文したときには、NHKの連続ドラマのテーマ音楽が奥の部屋から流れていた。蕎麦屋の店と駅が床続きになった待合室のベンチで、ひとりの女子高校生がディーゼル列車を待ちながら読書をしている姿が、蕎麦が届くのを待つ私のテーブルから見えた。列車はしばらく来る様子もないのに人影がぽつぽつと増え始める。田舎特有の駅の待合室の風景だった。

鄙びた田舎の風情が満ちて溢れている食堂の壁には、映画ロケのときに俳優さんやスタッフで撮った写真が飾ってある。日焼けしたり色あせてしまっているものも多い。

今までに何度もこの駅舎を訪ねたことがあるけれど、再びこうして立ち寄ってくつろいで蕎麦を食いに寄れるところがあることと、ここから次の旅先へと旅立てることが私にとってこのうえない喜びです。

食べ終わって席を立つと同時に同年代風の男性が一人やって来て、カメラを構えてパチパチとやり始めた。その人の目的や気持ちはよく分かる。本を読んだか、映画を見たか、しかないのだ。

小説を読んだ人であれば、ここを訪ねる人の気持ちを少しは理解していただけるだろう。

名作は不滅なのだ。

2006年6月11日(日曜日) 【花も嵐もI】 '05年編集版

煙が目に沁みる 鍵掛峠 <山陰>

「煙が目にしみる」という名曲がある。その内容とはまったく関係ないけど、同じタイトルでバイクの回想記を書いたことがある。

それはGSXという私のバイクがエンジンから煙を吹き出すようになり、2度にわたる分解修理を経て甦るまでの期間のことを書いたものだ。煙にまみれて走ったツーリング日記でもある。人に例えればいわゆる闘病記のようなもので、色々と苦心もあったのでその日記を私は「煙が目に沁みる」と呼んでいる。

1993年の夏休みの鍵掛峠のことだった。バックミラーにうす青い煙がずっと映ったような気がした。まさか、と思いながらも何度かミラーを覗き込むたびにそれが確実に becoming。まっすぐに大山の展望台方向に上ってゆく道路を、何度も何度も行ったり来たりしながら、アクセルを開け気味で走ってみてはミラーに映る煙を確認していた。

オイルゲージを見ても激減ではなかったので緊迫した悲壮感はなかったものの、そこで急遽、私は旅を切り上げて帰ってくることになる。

あとで分解をしてバイクは甦ることになるが、諦めた一時期もあった。あくる年のゴールデンウィークに九州を走ったときには、オイルの1リットル缶を持参し毎日500ccほどのオイルを足しながら走った。そしてその夏の東北でもオイルは燃え続けた。GSXというバイクとお別れするために、九州も四国も東北も信州も、あらゆる所を走れる限り走った。しかし、それが愛着を生み育て、棄てられない原因となってゆくのだった。

「煙が目に沁みる」の連載を書き終えるころ、GSXは私のほんとうの相棒になっていた。永年の念願だった青森県への旅も果たせた。

煙を吐く前に走った距離よりもその3倍以上も走ったところに、私はGSXも晩年であることを悟った。修理のためにボアを1ミリも削ってしまってトルクが落ちていたし、熱伝導特性がアンバランスになってしまったため頻繁にオーバーヒートをした。

悩まされながらも多くの旅と長い距離をともにしてきた。鍵掛峠(山陰地方)へは、煙を吹いて修理を終えてから一度だけ行った。バイクの全快祝いを記念しての旅だった。煙を吹いた登り坂、ゲージを確認した道路脇の広場などが鮮明に思い出に残る。

引退前の最後となる長い旅は秋田県の稲庭へのツーリングだった。

2006年6月12日(月曜日)【花も嵐もI】 '05年編集版

第30話

其中庵・独り占め <山口県>

種田山頭火ゆかりの一草庵と其中庵を訪ねたことがある。どちらに行ったときも、人影疎らで静けさを独り占めできた旅だった。

1998年のゴールデンウィークのツーリングでは、まず四国に渡って松山市の一草庵に向かった。そのあと、フェリーで山口県へと渡り山口ユースホステルに泊まって、湯田温泉を巡って其中庵を訪ねました。

「汗が吹き出る静けさも独り占め」

などとひとりごとを言いながら其中庵を私は散策していた。見学者が少なく、騒々しさなどまったくなかった。

十分に味わったので「もう帰ろう...」と何度も思い、立ち去る準備をするものの、また引き返して其中庵の周りをぐるぐると回ったりしている。お名残り惜しいのだから、何もしないでいるのが良いのに。時間の過ぎるのを惜しまず、佇み、いつものように、ひとりごとをぶつぶつ言いながら、ここを出発するのをためらっている。

「桜の花は散っても咲いてるように見えるよ」

「誰も来ない方がいいね寂しいかい」

「いつもなら急ぐのにどうしたの」

などと自作が手帳に書き付けてある。

なかなかその場を離れない自分に腹が立つような気もするのだが、やっぱり帰るのが惜しい瞬間ってのがあある。出発するタイミングを計りながら自分との対話が続くのだ。

「この柿の木が庵らしくするあるじとして」(山頭火)

ただの乞食坊主だったのか、飲んだくれだったのか。

彼のどこに惹かれるのか。

自分でもわからないけれど、ほかのファンの皆さんだってきっとわからないのではなかろうか。

我々の心のなかに深々とその余韻を響かせ、また味わいを残してくれる作品をたくさん生んだ山頭火の故郷へ来て、山頭火という人の暮らしぶりに触れることができた。

これほど満足できた旅はこれまでにそう多くはなかった。

2006年6月14日(水曜日)【花も嵐もI】 '05年編集版

第31話

大観峰で長話しをした娘さん＜阿蘇＞

1994年のゴールデンウィークのツーリングのことだ。

やまなみハイウェイの長者原で野営をしたあと、阿蘇山方面に向った私は、ミルクロードを満喫して大観峰までやってきた。ゴールデンウィークということでたくさんのバイクが集まってきていた。マスツーリングの人たちが多く、快適な道路だけにスピードが出るタイプのバイクに乗る人たちが大勢だった。

阿蘇の高原に来たのだから美味しい牛乳を飲んで朝食としようと思い、お腹も減っているしそろそろ行こうか、とお尻をあげたとき、一台のバイクが私のバイクの近くに止まった。

私は近くの小高い芝の上に腰を下ろしてたので、その止まったバイクのことなど気に掛けず何気なしに眺めていた。

ヘルメットを脱ぐと若い女の子だった。駐車場のあちらこちらに群がるマスツーバイク人たちの視線が一斉にそちらに集まったような気がする。

「よし、ここはやはりソロの特権だから」と思って、私のいるところからその子に声を掛けたら彼女はこちらに歩み寄ってきてくれるではないか。

なにわナンバーだったので

「大阪からにしては荷物が少ないけど」

と言うと

「違うんです。今は北九州、柳川って知ってます？ あそこにいるの。大阪に5年いて今年の2月に実家に帰ったの」

ぷーたろうだという。

あのことろ、石野陽子ちゃんがテレビによく出ていたので、彼女が石野陽子に似ている

ように思った。単純な私は、嬉しくなってウキウキし、周囲の視線を僅かに感じながら2時間ほども話し込んでしまうことになる。

何を話したのか、まったく覚えていない。すっかりお尻が地面と仲良くなって、バイクのエンジンも冷えきってしまった。こういうときって、お別れがとても辛い。

もしも、もしも……です。

あのとき「一緒にミルクロードを走ろう」と彼女を誘っていたら、この年の九州ツーリングの展開はまったく違ったものに変わっていたかも知れない。

2006年6月15日(木曜日)【花も嵐もI】'05年編集版

第32話

どこまでも山の中・椎葉　＜九州＞

1994年の九州はソロツーリングだった。

新婚時代には夫婦でタンDEMで走り回ったが、子どもができてからはいつも一人だ。

1984年に夫婦で来たときとは違ったコースに変えてみた。しかしながらも、阿蘇山の外輪山の中には昔の思い出もあったので、それを思い出し、噛みしめながら、一気に高森峠を越えて国道265を南に走って行く。

荷物をくくっているネットに、ポカリスエットの1リットルボトルを縛り付けて走るという試みを最初にしたのがこのツーリングだった。(それ以後ペットボトルをくくりつけて走るというスタイルが定着し、仲間の中でも多く見かけるようになった。)

ゴールデンウィークだったにもかかわらず暑かったのだろうか、それとも、鄙寂れた山里の道端で休憩をするときの照れ隠しのようなものだったのかも知れない。

書庫の一角にある九州ツーリングマップという地図があり、他の地域ものと比べてシワが少ない。それは、激しい悪天候に遭遇しなかったためにダメージが少なかったことを物語っている。

国見峠の部分にボールペンの走り書きで「山深い」と書いてある。それが水に濡れて滲んだ痕跡がないのは、好

天に恵まれつづけたことを意味する。

「ミスコース」とも書いてある。椎葉村に入る前に「内の八重林道」へと曲がる交差点があって、ここでミスコースをした思い出だ。のんびりと穏やか、平穏なツーリン

グだったことが伺える。

国見峠はとりわけ思い出の深い峠のひとつだ。

記憶が日々薄れていってしまうのがほんとうに残念でならないのですが、「忘れてしまったらまた行けばいいじゃないか」は私の口癖です。そう言って自分を納得させている。そうでないと、旅人はいつか旅をする行き場を無くしてしまい、人生の楽しみが終わってしまうじゃないですか。

気がかりなこともある。峠にトンネルができて、快適な国道に変化してしまったらしいことを噂で聞いた。あのときの面影はもうあそこには残されていないのだろうか。幻となってしまうのか。美しい思い出だけが残し、やがて色褪せてゆくのだろうか。

あれから何年もの歳月が過ぎる。九州の阿蘇の南に広がる大山塊を後ろに控えて、九州最高の「鄙」を旅した五ヶ瀬町、国見峠、椎葉村の姿は、少しずつ変貌しているのだろうか。

21世紀へと時代が移り、世の中が変わった。

山村部の集中豪雨の災害の報道・ニュースを聞いた。

昔のままだと全て良いことだとはいえないけれど、人々の暮らしの中にある文化は守れているのだろうか。都会とはまったく違った文化を築き上げてきた田舎の人々が気の毒な思いをしていないだろうか。気がかりである。

2006年6月16日(金曜日)【花も嵐もI】 '05年編集版

第33話

また逢えるもう逢えない <九州>

椎葉の話を書いている「ああそうか、もう十年以上もの月日がたつのだな」という感慨が甦ってきた。桜島からぐるりと宮崎まで、一緒に走った太田市の病院の（当時）ICUにいるというTさんからは数度の便りが届いていた。

Tさんが田口さんだったか田上さんだったかさえも忘れてしまっているのが、ちょっと寂しい。

最後の便りが年賀で、「夏に結婚します」と書いてあった。

そもそも彼女とは、桜島ユースホテルで出会ったのがきっかけだった。もう一度会う約束をするわけでもないのに何度も顔をあわすようになったので一緒に走るようになった人だ。つまり、またバツタリと会わないかな、と期待をすると行く先で期待が叶う。そういうことの繰り返しをしているうちに一緒に走ることになる。

だから、お互いに名前も告げ合わずにしばらくご一緒した。青島でラーメンを食べながら初めて名前を尋ねた。別れのときが近づいてきているのを感じながら「そうそう、名前を尋ねていませんでした」って感じで言い出したのだった。思い出すとほろ苦い。そんな思い出のひとつだ。

土砂降りの宮崎港で「また、二、三年後、同じ日に同じ場所に、ツーリングに来てて会ったりしてね」と、ウルウルしながらさようならをしたのだった。

この会話が本当に実現するような予感がしていたのだ。ひとり旅の自信のようなものが湧いてくるのを胸にしながら、川崎行きフェリーに乗る彼女を見送った。でももう逢えることはなかった。「カーボンサイレンサーを気に入っている」と言っていたR1Z。レサーのようなスピードで突き進んでいったときの煙が強く印象に残っている。

【Tさん...】

本文でも触れていますが、お名前さえ忘れてしまいました。群馬県のかた、読んでいたら彼女の行方を教えて下さい。もう、立派なお子様もあることでしょうね。

【詳しいツーレポ】 夢をさがしに

2006年6月24日(土曜日) 【花も嵐もI】 '05年編集版

第34話

やっぱり僕はひとりの方が...

私の机の、いつも手の届くところに何冊かの本があります。

それは、子どものころに買った北山修の詩集、吉田拓郎や中島みゆきの歌の詩集、ルポや写真集、国立民族博物館の機関誌や先生の著書であったりします。

人は誰もただ一人旅に出て

人は誰もふるさとを振り返る

と北山修が「風」の中で書いているように、私たちもまた誰もが旅人であり、これから旅人になれるのだと思います。

また、北山修は、「さすらい人の子守歌」で、

旅に疲れた若い二人に

さすらい人の子守歌を

星は歌うよどこへ行くの

ふるさとのあの丘に

もう帰れない

今はもう帰れない

と書いています。

これからも私は、まだ出会ったことのない風景や味覚、人物、遺跡などを、自分の好奇心の続く限り訪ねて歩きたいと思います。

未知だったものと触れ合い、そして感動することで、自分をリフレッシュして新しい旅への原動力を得ることができます。

「旅をすること」って、自分をいつまでも若返らせておく手段なのかもしれません。

インターネットのメディアに情報が溢れています。

その情報を常に掴んでいないと不安になることがあります。

しかし、その不安は正しい不安ですか？私はそんな不安なら幾ら持っても構わないし、びくともする必要もないと考えます。

溢れる情報は適度にして、想像を膨らませるのだ。自らの心や感性が生み出す好奇心を胸に、それらを持続させて旅をするスタイルをこれからも維持したいと私は考えます。

誰のために、何のために旅をするのか。

何故、バイクなのか、何故、雨でも走るのか。

多くの人々が抱き、いつの時代の誰もが言い続けてきたことです。

これを書きながら、「ツーリングとは何なんだ」、などというような自問に、ぼんやりとですが理屈を当てはめようとしている自分がいて、あたかも答えらしいことをスラスラと自答している自分がいる。

すると、ちょっとした安堵が心に満ちて来る。

現実からの逃避なの？

感動をする欲求？

まっすぐな道をただ走りつづける衝動？

もうひとりの自分の発見？

人生の縮図を探すの？

ロマン？

生きている証拠？

青春を探すの？

限界を走り切る感動？

センチメンタル？

．．．．

しかし、やはりそこに答はない。

ある必要もないのかも知れない。

34話をもちまして「花も嵐も」は終わりです。(転載終了)
どうも、ありがとうございました。

2006年6月24日(土曜日)【花も嵐もI】 '05年編集版

【第5話・6話 番外】

素敵な駐在さん

第5話6話に書いた【花も嵐も】 素敵な駐在さん の事件のニュース記事を見つけたので、今頃ですけど、貼っておきます。

職質の警官が刺されて死亡、短銃も奪われる (2000-06-28)

28日午後2時半ごろ、青森県東通村白糠で、青森県警むつ署の佐藤勝男巡查部長(52)が職務質問中に男に刃物のようなもので左わき腹数カ所を刺された。男は走って逃走。佐藤巡查部長は病院に運ばれたが、意識不明の重体となり、その後死亡した。巡查部長が所持しているホルスターから実弾5発入りの短銃がなくなっており、同県警は男が奪ったとみて、行方を追っている。

同日午前、むつ市関根のガソリンスタンドに30歳くらいの男が1人で、福岡ナンバーのグレーのレンタカーに乗って現れ、ガソリンを給油した。男は金を払わず、店員が目を離したすきに逃走。通報を受けた県警が、付近に検問所を置いて男の行方を追っていた。午後2時過ぎ、このナンバーの車を発見した佐藤巡查部長が職務質問したところ、男にいきなり刺されたという。

2010年3月 3日 (水曜日) 【花も嵐もI】 '05年編集版

【第10話・番外】

もっとこちらへ 夏油温泉

もっとこちらへ 夏油温泉 <東北>

お湯に浸かるのが気持ちのいい季節になると、ちょっと昔の温泉のことを思い出したので番外でひとつ。

あれは山深い所にある温泉だった。尾根と谷を幾つも越えたら古ぼけた湯治旅館が軍事収容所のように並んでいた。湯舟は旅館の一番奥にあった。

温泉の湯舟の上には源泉が流れ落ち、とても熱かった。45℃くらいあっただろう。湯舟は長方形で、脱衣場は湯船の下流側にあった。混浴なので男も女もその脱衣場に入り混じっている。湯舟との仕切りもなかったので、服を脱いだ女性はその湯舟に向かって進み、まず掛かり湯をする。

下流側であるが、熱いので、あらららと驚き周囲を見回す人が多い。どこかに温いところがあるのではと思うのだろう。

そこで、湯舟の片隅にいる男性と視線が合う。もちろん私とも視線を交わすが、湯治になれている男性がいて親切にも対岸から声を掛けてやっている。

男性が

「もっとこっち。こっちの方が温いから」

といって上流のほうを指さしている。教えてもらった女性は、無言でそちらに移動する。

「もっとずっと奥の方よ」と男性が言う。

「ほんとうですかねえ」と女性が呟く。

そんなことを繰り返しながら女性は男性の言葉を信じ、上流の方に屈んだまま小刻みに横歩きをする。行く方向が意地悪にも上流なのだから、お湯が温くなるわけがない。逆に熱くて入り辛く、なってくる。

どうしてもアソコを隠すタオルを持つ手が疎かになり、対岸の方に腰掛けた私からは、見てはいけないものまで見えてしまいそうになる。というかマル見えになってしまっていた。

男性が彼女と知り合いだったのかどうかはわからないが、そういう雰囲気がいじわるだというまえに、会話自体が浴場の雰囲気を非常に和ませてゆく。罪が多少あったとしても終いには許し合えているのだ。

人間が自然に還ればこういうふうに振る舞い、一緒に湯舟に浸かり、身も心もほんとうの意味で清くなり、病も直り、ストレスも消え去ってしまうだろう。

夏油温泉までの山岳道路は、狭くて長い。自動車が少ない時代はそれはそれは途轍もなく秘湯だったことだろう。

人は、人と暮らし、大勢で社会を築き、利害を対立させ、いがみ合いをし始めたころから侵略という概念を持ち始めたのだとすれば、この湯治場の建物の中を通り過ぎる時、時空を越えてユートピアに降り立ったような錯覚に私は襲われた。

湯の効用や知名度などとは別に私はこの湯舟での出来事が強烈に印象に残り、ますます東北の温泉ファンになっていってしまうのでした。

2005年9月30日(金曜日)'05年編集版

あ と が き

作品発刊にあたって

この作品は、2005年にある出版社のコンテストに応募して入選したもので、ホームページの中に埋もれて消えてしまう運命であったのかもしれません。

しかし、このたびiBooks Autheor を利用して、iBookとして公開することを試みてみます。

ひとりでも多くの人に読んでいただけたら嬉しいです。

(筆者)